

【資料】 難聴学級での支援と指導についての研修会（2019年配布資料）

Copyright : kitanakamichisyo

1. 声や音の強さ（大きさ）について

*声や音の強さを表す単位は dB（デシベル）を使い、音源から1～2メートルぐらい離れたところで測定した値を使います

(1) 声の大きさ

- ① 2人で普通に話す時：() dB
- ② 2人で大きな声で話す時：() dB
- ③ 授業中に先生が話す声の大きさ：() dB
- ④ 叫び声：() dB

(2) 音の大きさ

- ① セミの鳴き声：() dB
- ② 車のクラクションの音：() dB
- ③ ジェット機が頭上を通過した時：() dB

(3) dBについて

- ① 数字が大きくなると音が大きくなります
- ② 100dBを越え、音が大きくなりすぎると痛みを感じるようになります

(4) 聴力について

- ① 聴力が80dBの人は、セミの鳴き声がきこえる時ときこえない時がある、何の音か判断するのは難しい
- ② 聴力検査は、周波数ごとにどれだけ音がききとれるか調べる
 - ・ きこえる人の最小可聴閾値を0dBと決めている
 - ・ 聴力が〇〇dBという時は、500、1000、2000Hzのみを考えている
 - オーディオグラム全体を見てきこえ方をチェックする
 - (平均聴力レベル： $(500+1000 \times 2+2000) \div 4$)

(5) 聴覚障がいの種類

- ① () 性：外耳～中耳に原因があり音声が小さくきこえるだけで補聴器の効果が出やすい
- ② () 性：内耳や聴神経に原因があり音が歪んできこえることが多く補聴器の効果は個人差が大きい
- ③ 混合性：伝音性と感音性が重なったもの、例えば感音性で中耳炎を併発している場合

(6) 補聴器や人工内耳について

- ① 補聴器の限界
 - ・ 騒音に弱い：騒音（声よりもパワーが大きい）があれば声がききとりにくくなる
 - ・ 水や衝撃に弱い
 - ・ 声を選択してききとることは難しい（音や声が聞こえる向きや距離に影響を受ける）
- ② きこえを補う機器
 - ・ 補聴器：耳かけ型、耳穴型、箱型
 - ・ 人工内耳：手術をして電極を内耳に埋め込み、聴力を回復させる方法もある
- ③ ワイヤレス補聴援助システム：話し手が送信機（マイク）を付け、補聴器（人工内耳）に受信機を取り付けダイレクトに声を聞く
 - ・ FMシステム送受信機から Roger 送受信機へ移行

(7) 自立支援法：身体障がい者手帳

- ① 2種6級：両耳の聴力が() dB以上のもの、1側耳が90dB以上で、他側耳が50dB以上のもの
- ② 2種4級：両耳の聴力が() dB以上のもの
- ③ 1種3級：両耳の聴力が() dB以上のもの
- ④ 1種2級：両耳の聴力が() dB以上のもの

* 1種と2種では受けられるサービスに違いがある

(例：1種では、JRや私鉄各社、高速道路の料金の割引あり)

* 大阪市では平成28年度から聴力が30dB～70dBまでのきこえにくい子（18歳未満）が補聴器を購入する際に購入費の一部を負担する制度がスタートしている

2. きこえにくい子どもたちのコミュニケーション方法

- ①手話のみを使う
- ②口話（補聴器を活用し相手の声を口の動き（読話）も参考にしつつ聞き、自分は発音して伝える）のみを使う
- ③手話と口話を併用する
- ④筆談を使う

3. きこえにくい子どもたちが分かりにくい時

(1) うしろから（離れたところから）話しかけられた時

○きこえにくい子どもたちが分かりやすい方法

- ・必ず前から話す（うしろにいる時は前に回り話す）→うしろから1日に何度も肩をたたかれるのは不快
- ・アイコンタクトなど合図をしてから話す
- ・少しゆっくりめに話す

(2) 複数の人が同時に話す時：グループでの話し合い、休み時間、給食の時間、掃除の時間など

○集団の場面での配慮

- ・話し手を明確にする→話す人が挙手してから話す、順番が分かるように話す
- ・きこえにくい子が確認してから話し始める
- ・ききとれないことばは文字で書く→ききとれないことばはくり返し言っても、ききとれる可能性は低い
- ・ワイヤレス補聴援助システムのマイクや磁気ボードを活用すると効果がある

(3) 同時に2つのことをする

○きこえにくい子どもたちが把握しにくい状況

- ・ききながら（話し手の口の動きも読む）作業をする
- ・資料を見ながら説明をきく
- ・遠足のしおりを見ながら説明をきく
- ・説明をききながらメモをとる

○きこえにくい子どもたちが把握しやすい状況

- ・資料（しおり）だけを見る時間を確保する
- ・メモをとる時間を別に用意する

*作業が1つずつ処理できるようにする

(4) 授業中の孤立感：きこえにくい子だけが笑えず、作り笑いをしてしまうことがある

○作り笑いをしてしまうことについて

- ・100%解消するのは難しい
- ・みんなが笑っていて自分だけ分からず笑えないのが一番つらい

*きこえにくい子どもたちは、このようなおもいをしていることを知っておくことが必要

(5) テレビや映像を見る時

○映像を見る時の工夫

- ・字幕のついたものを使う→きこえにくい子が映像を見ているのと同時に説明を加えても理解できない
- *リアルタイムに情報を知りたい→あとで分かっても楽しめない

(6) 補聴器をすれば音声がききとれる子の場合

- ・音声をききとり理解できる場合とできない場合が混在する（騒音の影響を受けやすい）
- ・音声をきき理解できているかどうかの判断が難しい
（担任やきこえる子どもたちのサポートをうまく受けられないことがある）
- ・自分できこえにくい状況を説明することが難しい

4. 学習について

(1) 実態の把握

①絵画語い発達検査（PVT-R）：単語中心に語の理解力を調べる

②読書力診断テスト：読解力を調べる

③絵を見て表現する：文章表現力を調べる

* 複数のテストを定期的（1年に1回程度）に実施し比較しつつ実態の把握をする

(2) ことばの学習：学習課題

① () を広げる

- ・ことばの知識を増やし、柔軟な発想ができるようにする

例：ことばの連想、絵を見て状況や会話を考える、文を読み感想を書くなど

② () を高める

- ・相手に伝わりやすく説明をしたり、文や文章で表したりできるようにする

例：短いストーリーを読み感想を書く、話の続きを考え表す、理由を説明する

作文の学習（1つのことを詳しく書く、会話や感想・意見を入れる、題名を工夫する、熟語や慣用句など学習した表現を使う）

③ () を高める

- ・不十分な情報でも、だいたいの内容をつかみ活用ができるようにする、読解力を高めることにつなげる

例：文を読み原因を考え説明する、会話を読み何の話か想像する

*生活言語の拡充のみでなく学習言語の獲得をめざす必要がある

④市販のドリルの活用

- ・「語彙力アップ 1300」 すばる舎 1944 円 ・「テーマ別特訓ノート国語 言葉」 学研プラス 972 円
- ・「仲間のことば 1000」 小学館 1836 円 ・「絵でわかる日本語場面別表現 250」 アルク 2376 円

5. きこえにくい子どもたちへの情報保障

*情報保障とは、きこえにくい子どもたちに、きこえる子どもたちと同等の情報を提供しようとするこ

→主に () な情報を重視している

(1) 音読をする際の配慮

○隣の子が、読んでいるところを押さえて示す

- ・隣の子がスタンバイできるようなタイミングをはかる

(2) 話す人が原稿を用意する、発表原稿を用意する：集会などの司会原稿をコピーする

(3) 学習で使用する映像に字幕を入れる

(4) パソコンを活用する：入学式、卒業式など

(5) 数字は手話で表す

- ・数字のききとりは難しい：(例) 2 (に) と 4 (し)、11 (じゅういち) と 17 (じゅうしち)

→数字をききまちがえるとトラブルの原因となる

(6) 情報保障についての理想

① () 性：きこえる子どもたちと同程度の情報を得ることができる

② () 性：きこえる子どもたちと同時に 情報を得ることができる

③ () 性：できるだけ楽に情報を得ることができる

④ () 性：状況に合わせて、情報保障の方法が選択できる

6. きこえにくい子どもたちの自己認識を深める

*障害認識ということばを使用すると、聴力や補聴器または人工内耳についてのみ知識を深めればよいと考え
てしまうことがあり、「自己認識」ということばを使用することにしていきます

(1) きこえにくい子どもたちの自己認識を深めるとは

①自分の聴力や補聴器の効果と限界について理解している

②自分にとって不利になる状況を理解している

③自分にとって分かりやすい方法を理解している

④自分のきこえ方、補聴器の効果、望ましいサポートの方法など、相手に伝えることができる

(2) きこえにくい子どもたちへの質問

○話が きこえにくいのはいつ？

- ・休み時間の運動場→チャイムを ききのがすこともある
- ・そうじの時間→ずっと音楽 (BGM) が流れている
- ・給食の準備中→食器等の音がやかましい
- ・階段での会話→声が反響する
- ・授業中、みんなが笑っている時→笑い声で先生のことばがききとれなくなる
- ・体育の時間→運動場では声が拡散する

(3) 他のきこえにくい子の体験から学ぶ：低学年の取り組み

- きこえにくい子が登場する絵（コミック）を活用する
 - ・きこえにくい子が取り組みにくい（参加しにくい）状況を考える
 - ・自分の経験を振り返るきっかけにする

(4) 話し合い活動：高学年の取り組み

- 対立する意見のグループに分かれ話し合う
 - ・(例) テーマ：授業中、教室のあちこちから意見が出る時の対応の仕方
 - A グループ：発言していることを近く人に書いてもらう
 - B グループ：FMマイクを話している人に確実に渡し使ってもらう

(5) きこえにくい子どもたちの自己認識を深めるために

- ①自分のきこえ方や不利になる状況、分かりやすい方法など、考えるきっかけをいろいろな機会に用意する
- ②様々な情報保障の方法を実際に体験してみる
- ③他のきこえにくい子やきこえにくい人の考え方を知る

このとらえ方を重視し自己認識を深めることにつなげる

7. まとめ

(1) 聴覚障がいについての考え方

	障がいの受容	障がいの認識
障がいについての考え方	悲観的 克服すべきもの	自己肯定的 ありのまま
モデル	きこえる人	様々 特に、きこえない先輩
コミュニケーション方法	口話 手話については否定的	様々 手話を重視
きこえる人との関係	きこえないことを隠す 追従	望ましいサポート方法を要求 対等

(2) 難聴学級担当者の意識を高める

*子どもたちのことを何と呼ぶか？

- ①難聴：診断名
 - ・聴力が活用できるというイメージがある
- ②聴覚障がい：診断名
 - ・障がいについての定義が難しい
 - ・ろう者との関係で検討する必要がある
- ③耳が不自由：公共施設で使用されることが多い
 - ・マイナスイメージを持つ、哀れみを伴う
- ④きこえない：現象面
 - ・全くきこえないというイメージ
- ⑤きこえにくい：現象面
 - ・きこえにくさの程度は人による
- ⑥健聴者→きこえる人

(3) きこえにくい子どもたちに支援や指導をする際に検討すること

- ① () アプローチ：底上げ
 - ・言語力を高める（学習言語の獲得）
 - ・学力を高める など
- ② () プローチ：将来の目標（身につけたいこと）
 - ・自己認識を深める
 - ・情報を得るために行動する
 - ・マナーやモラルについての意識を高める

☆両面からの指導や取り組みを検討する

【手話で数字を表す】

